

---

---

# Toksave long PNG

~ Mi orait ~

Vol1.最後の秘境\_パプアニューギニア編

---

---

初めまして。私は、青年海外協力隊の23年度1次隊として、パプアニューギニアのウェワク市にあるセントメリー小学校に理数科教師として派遣されている近藤隆昌と申します。豊橋市出身として、市民の皆様にも、パプアニューギニアという国、また、青年海外協力隊活動を知っていただければと思い、『Toksave long PNG』(現地語 Tok Pisin で、『パプアニューギニアからの便り』という意味です。)を今回から書かせて頂きます。これからよろしくお願いします。

皆さんは、パプアニューギニアについて、どのようなイメージをお持ちでしょうか？どんな国なのか想像がつかないという方が多いのではないのでしょうか。私自身も任国がパプアニューギニアに決まるまで、ほとんどこの国のことについて知りませんでした。

そこで、簡単にではありますがパプアニューギニアについて、少し説明させていただきます。場所はオーストラリアの北東にあり、私の任地ウェワクもあるニューギニア島は世界第2の大島で、島の西半分はインドネシア領となっています。パプアニューギニアの国土は日本の約1.2倍とかなり広いです。人口は日本の約20分の1となっています。

【最後の秘境とも呼ばれるパプアニューギニアの地図】



[出典]bugbog.com

① 首都:ポートモレスビー ②現地語訓練地:マウントハーゲン ③任地:ウェワク

パプアニューギニアが独立したのは1975年で、まだ非常に新しい国です。言語は Tok Pisin と呼ばれる、現地で話されてた言葉と英語が混ざり合って生まれた言語が一般的に用いられています。私の感覚としては、7割ぐらいの言葉が英語の影響を受けているでしょうか。それもあって、英語も都心部を中心として、話されています。現在、私が担当している7年生(日本の中学1年生相当)の授業は、全て英語で行っています。ただし、農村部を中心として、地元根付いた言語は計800を超えと言われており、部族ごとにそれぞれの言語も持っています。

この部族・言語ともに800以上あるという多様性が、パプアニューギニアの大きな特徴です。同じ言葉話す人々を『ワントク』と呼び、ワントク内での仲間意識は非常に強いものがあります。ワントクが困っていたら何があっても手を差し伸べるといった文化が国全体として存在します。

少し長くなってしまいましたが、国全体の話はこれぐらいにして、今日は、私がこれまでに訪れた3都市の様子を紹介したいと思います。上記地図にマークさせて頂いた首都ポートモレスビー、現地語訓練地の山間部マウントハーゲン、そして現在も住んでいるウェワクの3都市です。

### ① ポートモレスビー

首都のポートモレスビーは、日本を飛び立ち一番初めに降り立つ地であります。首都というだけあり、生活に必要なものは比較的何でも手に入ります。数ヶ月前に、ショッピングモールと呼ばれる建物も初めて完成しました。この地は今、開発真っ只中です。その様子も写真でお届けしたかったのですが、滞在期間が非常に短く街の様子は撮影できてません。少し街から離れた場所になりますが、そこからの写真を載せておきます。

【首都の背の高い建物】



【首都の夕日】



### ② マウントハーゲン

先ほども、少しお話しましたが、パプアニューギニアで広く使われている言語に Tok Pisin 語があります。その習得のため、約4週間、山間部のマウントハーゲンで語学訓練を行いました。マウントハーゲンもパプアニューギニアの中では大きな都市に入りますが、最後の秘境と呼ばれるパプアニューギニアの本領発揮です！少し都市を外れば日本では決して見られない風景が広がります。山間部ということもあり、この地は約60年前まで外国人に発見されることなく、現地人が独特の文化を持ち生活していた地です。その当時は、もちろん服も草で作った腰みのでした。

少し驚くかも知れませんが、語学訓練の週末を利用して部族訪問してきたので、マウントハーゲン周辺の部族を少し紹介したいと思います。

【スケルトンマンと共に】



【マッドマン】



まずは、左の写真から。彼らは『スケルトンマン』と呼ばれる部族で、名の通りスケルトン(ガイコツ)のペインティングをしています。なぜこのようなペイントをしているかという、この部族は、人間を襲う怪物がいると信じていて、怪物に襲われないために、あえてスケルトンの格好をし、自分は、人間でないことを示しているのです。次に、右の写真は、『マッドマン』と呼ばれる部族です。泥で作られたお面を被って身体にも泥を塗っています。これは、このような格好をした精霊がいると信じられており、崇めるためその姿を真似ているということです。

少し驚かしましたが、日常生活で彼らは、このような格好を今はしていません。我々が部族の文化を学ぶため、文化紹介としてこのような格好になって頂きました。それでも、約60年前までは、本当にこのような格好をして生活していたと思うと驚きませんか？驚かしたお詫びもこめて、同じ場所で撮影した、現地の笑顔を見てください。

【普段の部族の様子】



【子供の笑顔は世界共通】



また、この語学訓練中に、農村部にホームステイさせてもらう機会がありました。先ほどの文化紹介とは違い、現在のリアルなパプアニューギニアの農村部生活を実感することができました。まずは、そのホストファミリーの家に向かうのでも、一苦労です。整備された道路がないため、山道を2時間ほど歩いて向かいます。この同じ道をホストファミリーの子供は学校に通うため、毎日歩いています。道の途中、まだ幼い1人の少女に出会いました。6歳ぐらいでしょうか？彼女は、大きな荷物もち、洗濯をしに大きな川に向かう途中でした。私が、汗を滴り落としながら歩いた山道を裸足で歩いていました。手には、トーチ(灯り)を持っており、洗濯が終わって帰る頃には、日が暮れているのかもしれない。

【洗濯に向かう少女】



【ホストファミリーの家】



私の泊まらせてもらったホストファミリーの家では、電気・水道はなく、雨水を貯めて料理などに使います。私のホストファミリーは、お父さん、お母さんに子供が8人の計10人という大家族でした。彼らはおもてなしとして、伝統料理のムームーを作ってくれました。バナナの葉に焼いた石を載せ、サツマイモを載せて、またバナナの葉で包み込み蒸し焼きにするというものです。日本で食べる『石焼きいも』そっくりです。

【伝統料理ムームーの調理風景】



【日本では見ないシュガーフルーツ】



農村部での生活は、全て自然と共に。子供との遊びは、草で王冠を作り、少しお腹が減れば、一緒に果物を取りに出かける。日が暮れたら寝る準備をして、朝日と共に自然と目が覚める。2泊3日の短い生活でしたが、彼らと共に生活ができた事は、僕にとって大きな宝物となりました。

続いて、任地であるウェワクについて紹介しようと思ったのですが、長文となってしまったため、ウェワクの紹介は次回行いたいと思います。パプアニューギニアに到着して2ヶ月、配属先の小学校に着任して1ヶ月が過ぎようとしています。パプアニューギニアの人々の優しさと、子供達の笑顔に囲まれて、毎日を過ごしています。外ではヤモリが『キーキー』と鳴き、他にも様々な昆虫、動物の鳴き声が聞こえてきます。協力隊の派遣期間は2年です。長いようで短いこの期間を有意義なものとするため、1日1日、大切に活動していきたいと思っています。それでは、Lukim yu gen！（現地語で『また、今度ね！』）

---

Written by Takamasa Kondo

St.Mary's Wirui Primary School Science & Maths Teacher